

## 実践2 減加法によるくり下がりのある減法指導のあり方

### 1年生『ひきざん』の実践を通して

#### 1. 単元名 『ひきざん』(1年生)

#### 2. 単元について

数と計算領域に関わって、第1学年の目標は、次の通りである。また、減法に関わる内容は次

(1) 具体物を用いた活動などを通して、数についての感覚を豊かにする。数の意味や表し方について理解できるようにするとともに、加法及び減法の意味について理解し、それらの計算の仕方を考え、用いることができるようにする。	の通り
---	-----

である。

(2) 加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。
--

ア 加法及び減法が用いられる場合について知ること。

イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。

ウ 簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること。

これまで児童は、10以下の数から1位数をひく減法、10より大きい数の構成、 $16 - 6$ のような計算、3口の数の計算、1位数と1位数をたして和が11以上になる加法の意味とその計算方法などを学習してきた。

本単元において、児童は10いくつから1位数をひく減法で、くり下がりのある減法に初めて出会う。くり下がりのある減法で大切なことは、被減数を10といくつとしてとらえることである。被減数を10といくつに分解して、10から減数をひいて残りの数をたす減加法と、被減数の一の位に目をつけて減数をその一の位の数といくつかに分解し、まず被減数の一の位の数をひいて、さらに10から残りの数をひく減加法を学習する。加法よりも減法のほうが児童にとって抵抗があるため、形式的な練習を急がず、ブロックなどの操作と計算のしかたを対応させながら、その考え方をしっかり身に付ける必要がある。その上で、計算カードなどを使いながら、くり下がりのある10いくつから1位数をひく減法の計算が確実にできるようにしなければならない。

本単元では、10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法を初めて学習する。既習の減法(10以下の数から1位数をひく減法・ $16 - 6$ のような計算)を問題提示場面で、ブロック操作も交えながら復習し、くり下がりのある減法の仕方について考える足場を固めていきたい。ブロック操作で演算の仕方を考えるとき、数えひきの考えから抜け出せない場合が考えられるので、減加法や減加法によるブロック操作と説明を結びつける活動を通して、くり下がりのあるひき算の技能の定着を図りたい。また、ブロック操作を十分行った上で、式と結果だけを見て、言葉だけで説明する活動を通して、念頭で減加法や減加法を使って正しく計算できるようにするとともに、計算カードなどを用いて、10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法の計算の習熟を図りたい。

#### 3. 研究の重点に関わって

##### 重点1 学習内容からみた単元や単位時間の理想の表現を明確にすること

具体的な場面や問題文から立式することや、被減数を10といくつとしてとらえて考えることは、これまでのひき算で十分学習している。本単元は、10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法に初めて出会う時間であり、10いくつのばらから一度に減数がひけないことが、児童達にとって一番

大きな抵抗となることが考えられる。そこで、ブロックを使って計算の仕方を考える活動と、自分の考えを説明する活動時間を十分確保するために、問題文から立式することや、被減数を10といくつに分けて考える等の既習内容については、極力時間をかけないようにした。これは、本時に関わらず、各単位時間でも、評価規準に迫るために、時間をかける場面を具体的に考えるように心がけた。また、単元末では、被減数や減数によって減加法と減々法を使い分けることが理想ではあるが、まずは10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法の計算が確実にできるようになることが必要である。そこで、今後、ひき算の筆算にも生かされる減加法を全員が確実にできるようにするため、本時は、10のまとまりに着目し、一度に減数をひくことを定着させる時間とした。このように、各単位時間における習得することを明確にすることが理想の表現に迫ることであると考えた。

さらに、各単位時間において、振り返りの場面で類似問題を位置づけた。これは、追究した内容が一般化できることを確かめるためである。また、身に付けさせたい表現の定着を図るために、この類似問題において「おはなしドリル」を位置づけ、ブロック操作をしながら説明し合う言語活動を取り入れた。この内容を児童の言葉として単元指導計画に位置づけた。これは、習得することを明確にするためだけでなく、課題追究した内容を授業終末に活用してこそ、理想の表現に迫るものであると考えたからである。

## 重点2 理想の表現に迫るための単位時間の具体的な手だてを明確にすること

単位時間の具体的な手だてとして、以下の2つのことに重点的に取り組むことにした。

自分の考えをもったり、既習内容を使って説明するための場を設定する

身に付けさせたい表現の定着を図る「おはなしドリル」を位置づける

< について >

思考を支える数学的な考え方（本校ではアイデアと呼ぶ）や数学的な表現を支えるもの（本校ではアイテムと呼ぶ）を自分の力で見つけて活用できる場を常に提示するようにした。これは、自分の力で本時必要な考え方を引き出せるようにするためである。また、要点をしぼって既習内容を掲示したり、必要に応じて掲示を前面に張り出したりすることで、自ら考えが進められるように試みた。



本時は、既習の「 $15 - 3$ 」の計算の仕方を前面に掲示し、「被減数を10といくつにわけること」「ばらの5から一度に減数をひくこと」「その差と10で答えがでること」を振り返り、本時は、10から一度に9をひけば、その後は、既習と同じ考え方で差が求められること（減加法）に容易に気付けるように試みた。

< について >

全体で課題追究した結果が一人一人の力として習得されているか、また結果が他の場面でも活用できるかどうか確かめるために、授業終末に「おはなしドリル」を位置づけた。数学的な考え方を順序立てて操作したり、言葉で表現したりする中で、言語活動の充実を図り、数学的な考え方を確実に身に付けることこそ、理想の表現に迫るものと考えた。

本時では、「 $13 - 9$ 」の計算の仕方を追究した後、「 $12 - 9$ 」を類似問題として取り組み、以下のように説明することが、身に付けさせたい表現を定着させることができると考え試みた。

2から9はひけないので、まず、12を10と2にわけます。つぎに、10から9をひいて1です。1と2で3。だから、 $12 - 9 = 3$ 。

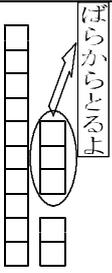
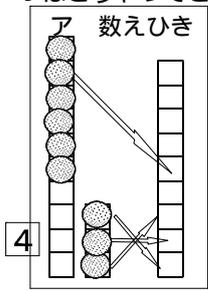
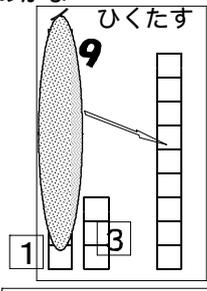
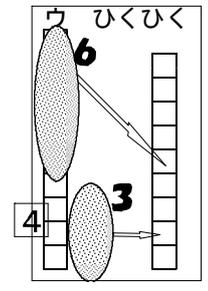
また、「おはなしドリル」を聞く視点として、ブロックの10を指し示し、9をとる操作と、「12の中の10から9をひいて1です」の説明が一致することとした。聞く

視点を明確にすることで、聞く側の思考が連続し、仲間の説明のよい点を発見できること考えた。

4. 本時について (1/9)

(1) ねらい : 13 - 9 の計算のしかたについて、減数の9をどこからとればよいかブロックを使って考える活動を通して、減加法によるくり下がりのある減法の計算のしかたを理解することができる。

(2) 本時の展開例

場	学 習 活 動	指導と評価
必然	<p>1. 問題の場面把握をする 前の時間まではたし算の勉強をしたね。今日からひき算の勉強をするよ。15 - 3 を計算してみよう。 ・10と5をわけます。5 - 3 = 2です。10 + 2 = 12 だから15 - 3 = 12です。ブロックで確かめてみよう。</p> <p>問題 うさぎを13ひきかっています。こやのそとに9ひきとびだしていきました。こやのなかになんびきのこっているでしょう。</p> 	<p>【評価規準】 一の位だけから減数が引けない場合に数えひきをしないで、13のなかの10から9をとればよいと考える。 &lt; 数学的な考え方 &gt;</p>
課題	<p>2. 課題づかみの見通しをもつ ・「のこりは」だからひきざんで、しきは13 - 9 ・ばらから9がひけない。</p> <p>課題 ばらからいちどにひけないときの ひきざんのしかたを おはなししよう</p>	<p>児童の学習状況 (B)</p>
追究	<p>3. 課題解決の見通しをもつ うさぎをブロックに置き換え、ブロック操作をしながら、ひき算のしかたをお話する準備をする。</p> <p>4. 13 - 9 の計算の仕方を考える</p> <div data-bbox="225 965 943 1496"> <p>9はどうやってとるのかな</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="240 999 448 1290"> <p>ア 数えひき</p>  <p>1こずつひいていくと、のこりは4こになる。 1こずつひいている</p> </div> <div data-bbox="480 999 687 1290"> <p>イ ひくたす</p>  <p>ばらからいちどにひけないので、まず10から9をとります。のこった1と3をたして4</p> <p>10からひいている</p> </div> <div data-bbox="719 999 927 1290"> <p>ウ ひくひく</p>  <p>まずばらから3をとります。6こたらないので10から6をひいて、のこりは4</p> <p>ばらからひいている</p> </div> </div> <p>うさぎの動きと一番近いのはどれかな?</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="225 1525 496 1637"> <p>イです。10のまとまりから、いっぺんに9をひいているからです。</p> </div> <div data-bbox="528 1525 703 1637"> <p>うさぎは9ひきとびだしていったよ。</p> </div> <div data-bbox="719 1525 943 1637"> <p>アです。じゅんばんに1こずつひいていくのがいちばんかんたんです。</p> </div> </div> <p>イの方法をみんなで確かめてみよう。 ・「まず、13を10と3にわけます。つぎに、10から9をひいて1です。1と3で4です。だから、13 - 9 = 4です」</p> </div>	<p>確実に定着させるために</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・10いくつひく1位数の計算について、ブロック操作を振り返ることで、既習のひき算は、ばらからひけたことを確かめる。</li> <li>・どこから9をひけばよいかのわからない児童には、「9個ブロックが並んでいるところはないかな」と助言し、減加法のブロック操作に気づけるようにする。</li> <li>・答えが4と出ているが、説明できない児童には、数えひきをしている場合が多いので、「9を一度にひけないかな」と助言し、10のまとまりから減数をひけばよいことに気づけるようにする。</li> <li>・9はひいたが答えがわからないでいる児童には、「残りのブロックをたしてごらん」と助言し、1 + 3に気づけるようにする。</li> <li>・減加法での13 - 9の計算方法をブロックで何度も確かめることで、説明とブロック操作を結びつける。</li> <li>・類似問題12 - 9について、ブロックを操作しながら説明し合うドリルを通して、減加法の定着を図る。</li> <li>・ブロックの10を指し示し、9をとる操作と「12の中の10から9をひいて1です」の説明が一致することを聞く視点とする。</li> <li>・評価問題はブロックを使って答えを求め、ノートに式と答えを書き、全員の定着度を見届ける。</li> </ul>
振り返り	<p>5. 類似問題に取り組み、一般化する (おはなしどりる)</p> <p>12 - 9</p> <p>ばらからいちどにひけないので、まず、12を10と2にわけます。つぎに、10から9をひいて1です。1と2で3。だから、12 - 9 = 3。</p> <p>・隣同士のペアで思考と表現のドリル (お話ドリル) を行う。</p> <p>まとめ ばらからひけないときは、10からひくよ</p> <p>6. 評価問題に取り組み 14 - 9 7. 本時の振り返りをする 操作や言葉、式と結びつけ、正しく指し示しながら説明できたことを評価する。</p>	<p>系統の一例</p> <p>小学校1年生 『のこりはいくつ ちがいはいくつ』 『のこりはいくつ (8 - 5などの計算)』 『たしざんとひきざん (新)』 『12 - 3のなどの計算』</p> <p>小学1年生 『たしざんとひきざん』 小学2年生 『ひき算』 『ひき算のひき算』 小学3年生 『3けたのたし算とひき算』 中学1年生 『正の数・負の数』</p>

### (3) 児童の動きや発言など

課題を把握し、見通しをもつ場面

T：今日からひき算の勉強をするよ。15 - 3 の計算のしかたを思い出してみよう。

C：15を10と5にわけます。つぎに、 $5 - 3 = 2$ です。

10と2で12です。だから $15 - 3 = 12$ です。

T：では、今日の問題を読んでみよう。

(問題場面を具体物で提示し、一斉に読む)

C：「のこりは」, があるのでひきざんだ。

C：しきは $13 - 9$ だ。

C：ばらの3から9がひけないぞ。

T：それでは、今日のめあては、ばらから一度にひけないひき算のしかたを、ブロックをつかってお話することだね。



既習内容の要点を絞って振り返ることで、本時の課題を追究するために必要な考え方を明確にすることができた。また、「数と計算」領域では、「わかっていること」「聞いていること」「前と違うところ」「式とそのしょうこ」を、毎時間発表することを位置づけたので、問題文から演算決定、めあて(課題)までの流れを児童の言葉だけで進められるようになったとともに、時間を短縮することができた。

### 追究場面における教師の指導・援助

(ブロックを使って9がひけない子に対して)

T：「9個ブロックが並んでいるところはないかな」「9個いっぺんにドバッとひけないかな」

(「10のまとまりから9をひくこと」「9を一度にひくこと」に着目させる)

(答えは4と出ているが、説明できないでいる)

T：「どこから9をひいたの」 自分は、減加法をしているのか、減々法をしているのか、数え引きをしているのか、はっきりさせる。

T：「いっぺんに9をひいてみよう」 数え引きをしている子に対しては、減加法で考えを進めた方が早く答えが出ることに気付かせる。

(9はひいたが、答えが分からないでいる)

T：「残ったブロックはどこにあるかな」

(残りのブロックの1と3を指し示しながら、 $1 + 3 = 4$ と話せるようにする)

つまずきに対して、具体的な言葉とブロックを指し示す場所を明確にしたことで、教師が話しすぎてしまい、子どもに考えさせる場面を奪ってしまうことがなくなった。また、常に言葉と操作を結びつけて説明することを、子どもが意識できるようになった。



## 5. 考察

### (1) 本時の指導に関わって

本時は、10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法を初めて学習する時間であるが、新学習指導要領で新しく取り入れられた $16 - 6$ や $15 - 2$ のような減法の学習をした後の単元である。10いくつから1位数をひく減法の式は見慣れている。しかし、10いくつのばらから一度に減数がひけないところに一番の抵抗があると考えられることから、どこから9をひくのか、自分の考えをもって仲間に説明できる時間を十分確保できるように試みた。大多数の子は、10いくつのばらからではなく、10のまとまりから一度に9をひく方法(減加法)を自分の考えとしてもつことができた。これは、既習内容として、一度に減数をひくという考えが十分身に付いているので、 $13 - 9$ の場合では、10のまとまりから一度に9をひくことに大きな抵抗をもたなかったと考えられる。また、ひきざんの単元に入るまでの「数と計算」領域で、交流の時間に、以下のような方法をとってきた。

自分の考えをもてた児童は、ブロック版をもって教師に説明する。(5人程度)

教師に合格をもらった児童は、仲間の考えの聞く視点はどの部分か指導を受けてミニ先生となる  
ミニ先生は他の児童の考えを聞いて評価する(教師から指導を受けた聞く視点をもとに)

ミニ先生から合格をもらった児童はさらにミニ先生となる

(この間に、考えをもてない児童を教師が机間指導する)

このように、「数と計算」領域において、交流の視点を明確にしてきた。本時は、「9をどこからひいたのか」を交流の視点としたため、「9を10からドバツとひく」という子どもなりの言葉を生み出すことができた。また、自分の考えがもてない子には、10のまとまりに着目させて考えられるような支援を十分行うことができた。全体交流で、減加法を十分確認した上で、 $12 - 9$ の類似問題で「おはなしドリル」を通して、さらに減加法をブロック操作と言葉を結びつけて表現したため、評価問題 $14 - 9$ において、全員が正解することができた。本時は、指導案には数え引きの考えも記載しているが、交流時までに数え引きはなくさせようと試みてきた。これは、全体交流時に、たくさんの方をまとめるまでの時間がないためである。しかし、教師から指導を受けた児童が、全員減加法であったために、交流時に、減々法で考えた児童が「それはちがいます」とミニ先生に言われて、戸惑ってしまう児童がいた。本来、減加法、減々法のどちらの方法でもよいが、本時は減加法を身に付けるというねらいから、減加法のみを知る時間となってしまったことが反省点である。

### (2) 改善にむけて

身に付けさせたい表現を明確にして、全員がその表現を身に付けることが理想の表現に迫るものであると考えてきた。確かに、身に付けさせたい表現として単位時間内で習得することはできるようになったが、本時のように、減々法の考えを消してしまうような結果にもつながった。今後、既習内容を駆使しながら、ブロック操作や言葉をつなげて自分の考えを表現できる子を育てていく必要がある。しかし、毎時間同じように計画することは難しいので、各単位時間の役割を、活用することを中心とする時間、習得することを中心とする時間として明確にする必要がある。そして、さらに評価規準を焦点化していく必要がある。

また、1年生では、単元前と単元後の変容のデータは取りにくいだが、単元前に児童の実態をしつかりと把握しておき、その実態がどう変容したのか分析し、今後の指導に、どうつなげていくことが児童の力となるのか、十分考えていきたい。

6 資料 単元指導計画（全9時間）

1次		【本時のねらい】13 - 9の計算のしかたについて、減数の9をどこからとればよいかブロックを使って考える活動を通して、減加法によるくり下がりのある減法の計算のしかたを理解することができる。
10	のまとまりから一度にひく	
場	学習活動	指導と評価
必然	うさぎを 13 びきかっています。こやのそとに9ひきでいきました。こやのなかになんびきのこっているでしょう。	【評価規準】<数学的な考え方> 一の位だけから減数が引けない場合に、数えひきをしないで、13のなかの10から9をとればよいと考える。
課題	1 立式する 「のこりは」なので『ひきざん』 式：13 - 9 2 課題をもつ ばらの3から一度に9がひけない ばらからいちどにひけないときの ひきざんのしかたをおはなししよう	児童の学習状況（B） 減加法を使って、くり下がりのあるひき算をブロックを使って説明することができる。
追究	3 課題を追究する かぞえ引き 減々法 13から順に1ずつ引いていく ・まず13を10と3に分ける ・つぎに、13から3をひく 減加法 ・10から残りの6をひく ・まず13を10と3に分ける ・つぎに10から9をひくと1 だから13 - 9 = 4 ・残った1と3をたす うさぎの動きと一番近いのは の方法だ。	確実に定着させるために ・どこから9をひいたかに着目させ、10から一度にひくと、うさぎの動きに近いことを体感させる。 ・減加法を全員に習得させるために、全員ブロック版をもって、立たせて説明させる。 ・一般化の問題として、類似問題を提示し、ブロックを使って説明する「おはなしドリル」を位置づける。
振り返り	4 一般化する 12 - 9 まず、12を10と2にわけます。つぎに、10から9をひいて1。1と2をたして3 だから12 - 9 = 3 ばらからひけないときは 10からひく 5 評価問題に取り組む 14 - 9	
2次		【本時のねらい】減数が8, 7の場合に、減加法の考えで計算過程を説明することを通して、10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法が正しく計算することができる。
10	のまとまりから一度にひく	
場	学習活動	指導と評価
必然	11 - 8 の けいさんの しかたを いいましょう。	【評価規準】<表現・処理> 10いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法を、ブロックを用いて減加法によって正しく計算することができる。
課題	1 課題をもつ 10のまとまりからひけばよい 10いくつから ひくときの ひきざんをれんしゅうしよう	児童の学習状況（B） 減加法を使って、くり下がりのあるひき算を順序よく説明することができる。
追究	2 課題を追究する ・11 - 8の計算のしかたをブロックを使って説明する。 ブロック操作 式だけみて念頭操作 ・11を10と1に分ける 11 - 8 ・10から8をひくと2 10と1 ・残った2と1をたす 10 - 8 = 2 だから11 - 8 = 3 3 一般化する 14 - 8（式だけみて） まず、14のなかの10から8をひいて2 つぎに、2と4で6です。だから14 - 8 = 6です。 ・10から一度にひく方法を「ひくたすほう」としよう。	確実に定着させるために ・減加法を定着させるために、10のまとまりから一度に8をひくことを、教師師範で、全員にブロック操作を確かめさせる。 ・類似問題を提示し、「おはなしドリル」により、減加法の定着を図る。 ・練習問題では、念頭操作で計算できるようにするために、10から一度にひいた差をメモさせる。
振り返り	4 練習問題に取り組む 17 - 8 12 - 8 15 - 7 14 - 7 5 評価問題に取り組む 13 - 8（計算過程を説明する）	

3次		【本時のねらい】10 いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法について、ブロックを用いて計算の仕方を通して、減々法によるくり下がりのある減法の計算のしかたを理解することができる。
ばらからひいて残りを10からひく		
場	学習活動	指導と評価
必然	にんじんが12ほんあります。3ぼんたべます。なんぼんのこりでしょう。	【評価規準】<知識・理解> 10 いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法で、減々法を使った計算のしかたが分かる。
課題	1 立式する 「のこりは」なので『ひきざん』 式：12 - 3	児童の学習状況（B）
	2 課題をもつ ばらからひけない。ひくかずが小さい  ばらからひいて ひきざんのしかたをおはなししよう	減々法を使って、くり下がりのあるひき算をブロックを使って説明することができる。
追究	3 課題を追究する ・12を10と2にわける ・つぎに2をひく ・10からのこりの1をひいて9 だから12 - 3 = 9	確実に定着させるために
	4 一般化する 13 - 4  まず、13を10と3にわかめます。つぎに3から4のうち3だけひきます。10からのこりの1をひいて9  ・まず、ばらからひいて、残りを10からひく方法を「ひくひくほう」としよう。  ひきざんは ばらからひいて のこりを10からひいてもよい	・挿絵に着目させ、うさぎがにんじんをばらの2本から食べることをおさえ、減加法を使わないことを徹底する。 ・減々法を全員に習得させるために、全員ブロック版をもって、立たせて説明させる。 ・一般化の問題として、類似問題を提示し、ブロックを使って説明する「おはなしドリル」を位置づける。
振り返り	5 練習問題に取り組む 11 - 3 6 評価問題に取り組む 12 - 3	
4次		【本時のねらい】ブロックを用いて、被減数を10といくつに分けて考える計算の仕方を通して、10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算を手際よく行うことができる。
ばらからひいて残りを10からひく		
場	学習活動	指導と評価
必然	カードとりをして、たくやさんは8まい、ゆかりさんは15まいとりました。どちらがなんまいおおくとったでしょう。	【評価規準】<表現・処理> 10 いくつから1位数をひいて差が1位数になる減法の計算を、減加法や減々法を用いて計算することができる。
課題	1 立式する 15 - 8	児童の学習状況（B）
	2 課題をもつ ひきざんは「ひくたすほう」と「ひくひくほう」の2つある  ひきざんのしかたを「ひくたすほう」か「ひくひくほう」でおはなししよう	減加法や減々法を使って、くり下がりのあるひき算を順序よく説明することができる。
追究	3 課題を追究する <ひくたすほう> <ひくひくほう> 15のなかの10から 15のなかの5をひく 8をひいて2 つぎに、10から3をひく 2と5で7。 こたえは7。	確実に定着させるために
	4 一般化する 16 - 8  <ひくたすほう> <ひくひくほう> ・16のなかの10から 8をひいて2 2と6で8 ・16のなかの6をひく つぎに、10から2をひく こたえは8	・減加法（ひくたすほう）か減々法（ひくひくほう）のどちらを使って計算したのか、自分の立場を明らかにさせる。 ・仲間の説明を聞く際に、8をどこからひいたのかを聞く視点として、減加法か減々法か判断できるようにする。 ・一般化の問題として、類似問題を提示し、ブロックを使って説明する「おはなしドリル」を位置づける。
振り返り	ひきざんは2つのほうほうでけいさんできる  5 練習問題に取り組む 14 - 5 13 - 5 6 評価問題に取り組む 14 - 6	

5次		【本時のねらい】絵から減少や比較の場面を想起し問題を作る活動を通して、減法の問題作成	【本時のねらい】絵から減少や比較の場面を想起し問題を作る活動を通して、減法についての理解を深めることができる。
場	学習活動		指導と評価
必然	13 - 6のしきになるおはなしをしましょう。		【評価規準】<数学的な考え方>式からそれに対応する具体的な場面や数量の関係をとらえて、問題を作成する。
課題	1 課題をもつ ひきざんだから、「のこりは」や「ちがいは」をつかう。 えにあうように、ひきざんのもんだいをつくろう		児童の学習状況(B) ひき算言葉を使って、減少や比較の場面をとらえ、減法の問題を作成することができる。
追究	2 課題を追究する ・とんぼが13ぴきいます。6ぴきとんでいきました。なんぴきのこっているでしょう。 ・あかいはなが13ぼん、きいろいはなが6ぼんさいています。どちらがなんぼんおおいでしょう。など		確実に定着させるために
振り返り	ひきざんのもんだいをつくるときは、ひきざんことばをつかう 3 練習問題に取り組む 自分でひきざんの式になるおはなしをつくろう		・とんぼが何匹いて、何匹とんでいったか、全員で確認し、問題の数値を間違えないようにし、一人一問は作成せる。 ・一問作成できたら、違うひき算言葉を使って作成させる。
6次		【本時のねらい】ひき算の計算カードを使って計算の練習をすることを通して、10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算が確実にできる。	
計算カード演習 (ひき算習熟)			
場	学習活動		指導と評価
必然	カードをつかって、ひきざんのれんしゅうをしよう。		【評価規準】<表現・処理>10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算が正しくでき、答えが同じになるカードを集めることができる。
課題	1 課題をもつ ・計算カードを準備し、練習の方法を知る。 ・一人で練習する      ・ペアで練習する こたえがおなじになるカードのなかまあつめをしよう		児童の学習状況(B) 10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算が正しくできる。
追究	2 課題を追究する ・式を見て答えを見つけ、答えが同じになるカードを集める。 ・集めたカードを見て、気付いたことを話し合う。		確実に定着させるために
振り返り	こたえがおなじになるカードはななめにならんでいる。 3 練習問題に取り組む フラッシュカードでひき算の練習を繰り返す		・時間はかかっても、式を見て、答えを唱えてからカードを裏返させる。
7次		【本時のねらい】10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法について、ひき算カードを使って計算の答えの大きさを比べる活動を繰り返すことで、計算が確実にできる。	
計算カード演習 (大きさ比べ)			
場	学習活動		指導と評価
必然	けいさんカードをつかって、大きさくらべのゲームをしよう		【評価規準】関心・意欲・態度>カードゲームに進んで取り組み、くり下がりの減法の計算に慣れようとする。
課題	1 課題をもつ 計算カードを準備し、ゲームの方法を知る。 どちらが大きいか ただしくらべてゲームをしよう		児童の学習状況(B) 10いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算が確実にできる。
追究	2 課題を追究する ・2人ペアで計算カードをだしあって答えを出し合うカードゲームを行う。 ・どちらが大きいかさばやく答え、勝敗を決める。 ・ペアをかえて、繰り返し同じゲームを行う。 ひきざんが まえよりはやくただしくできるようになっている。		確実に定着させるために
振り返り	3 練習問題に取り組む フラッシュカードでひき算の練習を繰り返す		・2枚のカードの答えを素早く答えるようにするため、競争を意識させる。 ・全員立たせ、ひき算のフラッシュカードの答えがわかったら、座る練習を繰り返す。

8次		【本時のねらい】ひき算カードをつかったかるたゲームを行うことを通して、10 いくつから1位数をひいて、差が1位数になる減法の計算のまとめをすること ができる。
計算カード演習 (かるた遊び)		
場	学習活動	指導と評価
必然	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">けいさんカードをつかって、かるたゲームをしよう</div>	【評価規準】<表現・処理> 減加法や減々法の考え方で計算 することができる。
課題	1 課題をもつ ・計算カードを準備し、ひき算かるたの方法を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">はやく ただしくカ-ドをとろう</div>	児童の学習状況(B) 10 いくつから1位数をひいて、 差が1位数になる減法の計算が確 実にできる。
追究	2 課題を追究する ・各グループ(4名ほど)で計算カードを出し合って答える ひき算かるたを行う。 ・何度も繰り返す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ひきざんが まえより もっとはやく ただしくできる よくなっている。</div>	確実に定着させるために ・早く正しくひき算ができるよ う、勝敗を意識させる。 ・全員立たせ、ひき算のフラッ シュカードの答えがわかったら、 座る練習を繰り返す。
振り返り	3 練習問題に取り組む フラッシュカードでひき算の練習を繰り返す	
9次		【本時のねらい】単元における基礎・基本を確かにしたり、日常生活に適用 できる場面をもとに、発展的に考えたりできる。
復習		
場	学習活動	指導と評価
必然	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ひきざんのれんしゅうをしよう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の問題を自分の力で取り組む           <ul style="list-style-type: none"> <li>・くり下がりのある10いくつ-1位数の問題</li> <li>・具体的な減法の適用場面から立式して解く問題</li> </ul> </li> <li>・仲間と交流して、考えを補充したり修正したりする</li> <li>・全体で交流する</li> </ul>	【評価規準】<数学的な考え方> ひき算の仕組みであることを絵 や、問題文から考えることができ る。
		児童の学習状況(B) ・10いくつから1位数をひいて、 差が1位数になる減法の計算が 確実にできる。 ・減法の適用問題から立式して問 題を解くことができる。
		確実に定着させるために 全部できた児童は、進んで迷って いる児童にヒントを与えるような 教え合い活動を位置づける。